

論文審査の結果の要旨

氏名：廣 田 旭 亮

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：カモガヤ・アルテルナリア重複感作で発症するアレルギー性結膜炎マウスモデルの自然型および獲得型アレルギー反応に関する検討

審査委員：（主 査） 教授 藤 田 英 樹

（副 査） 教授 權 寧 博 教授 中 靜 裕 之

教授 大 島 猛 史

廣田旭亮氏の論文、「カモガヤ・アルテルナリア重複感作で発症するアレルギー性結膜炎マウスモデルの自然型および獲得型アレルギー反応に関する検討」では、複数抗原による重複感作というこれまでのアレルギー性結膜炎マウスモデルでは報告されていない新規手法を用いて、アレルギー性結膜炎の発症および病態のメカニズムに関する検討が行われている。本研究では、腹腔内感作(-)抗原 1 回点眼群、腹腔内感作(+)抗原 1 回点眼群、腹腔内感作(+)抗原 3 回点眼群、腹腔内感作(-)抗原点眼(-)群の 4 群の比較において、眼部の臨床所見、病理組織学的所見、結膜組織中の好酸球密度、**real-time revers transcription polymerase chain reaction** 法による結膜組織中のサイトカインおよびケモカインの発現量、免疫蛍光染色による組織中のサイトカインの蛋白レベルでの発現等が検討されている。その結果、本研究において、結膜組織への好酸球浸潤や **thymic stromal lymphopoietin (TSLP)**、**interleukin-16**、**CCL11** の発現上昇がカモガヤおよびアルテルナリア抗原誘発性のアレルギー性結膜炎の発症や病態に関与することが示されている。特に、カモガヤ・アルテルナリア重複感作によるアレルギー性結膜炎マウスモデルにおいては、I 型アレルギー反応と考えられる即時相から **TSLP** の発現上昇と好酸球浸潤がみられた点が重要な発見であると考えられる。つまり、本マウスモデルの解析結果から、**TSLP** がアレルギー性結膜炎におけるアレルギー性炎症の病態形勢において重要な因子の一つであることが示唆される。本研究は、新規抗原感作モデルを用いた解析であり、得られた結果はヒトにおけるアレルギー性結膜炎の病態理解に新たな示唆を与えるものであり、さらに新規治療の開発にもつながる可能性があると考えられる。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

令和 6 年 2 月 28 日